

- | |
|--|
| 1. 特に効果的であり改善に資した事例
A. コースワークの充実・強化
⑤他分野の大学院生との共同研究の実施 |
|--|

⑤他分野の大学院生との共同研究の実施

《人社系》

●京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻 「研究と実務を架橋するフィールドスクール」の事例

(具体的に何を実施したのか)

院生発案共同研究を実施した。これは複数の院生がひとつのグループを組織し、院生の発案によりメンバーに共通のテーマを設定し、そのテーマについて海外でワークショップを組織・実施するもので、当初の予定通り、2008年度～2010年度の3年間で13の共同研究(計38人)が組織された。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

他分野の大学院生とともに共通のテーマや海外でのワークショップを組織・実施する過程を通じて、院生自らの研究を地域領域横断的な視点からとらえなおすことをめざした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

帰国後には成果集を作成・編集・刊行した(計11冊)。また、海外で実施された報告会の成果を本研究科内で報告する、合同発表会が院生を中心に組織され、アジア・アフリカの地域(専攻)をこえた研究成果発表の場として継続的に実施されている。これまでは、研究科の教育カリキュラムでは、公聴会以外には、専攻を超えた研究発表の場をカリキュラムのなかにとりいれにくかったため、院生主体の新たな取り組みとして大学院教育の改善・充実に貢献した。

《医療系》

●名古屋市立大学薬学研究科

「薬工融合型ナノメディシン創薬研究者の育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

単位互換講義、あるいは薬工融合特論講義を受講し、座学で異分野を知識として獲得した主に大学院博士前期課程2年の学生が、平成21年度より名古屋工業大学の大学院生は名古屋市立大学へ、名古屋市立大学の大学院生は名古屋工業大学に、およそ2週間の期間、研究体験(インターンシップ)を行った。また、1年目に座学を通して異分野に触れ、2年目に実際の異分野を経験する研究体験、そして3年目に異分野間で新たな研究プロジェクトを立案・展開するという当初の計画を目指す中で、3年目に複数のプロジェクトが立ち上がり、その中で有望なものに対しては経済的な支援を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

インターンシップは当初の計画では1-3ヶ月のプログラムであったが、本来の研究が忙しくなるM2の夏という大事な時期にスケジュール上、実施することになり、訪問研究として現実的な2週間という期間を設定した。時期も7月から10月と幅を持たせ、参加学生、

1. 特に効果的であり改善に資した事例

A. コースワークの充実・強化

⑤他分野の大学院生との共同研究の実施

受入研究室が柔軟に対応出来るようにした。受入についても、名古屋工業大学は5研究室、名古屋市立大学は10研究室が協力し、学生の選択の幅を持たせた。受入の研究室がそれぞれの体験研究のテーマ・内容を公開し、それについて、参加学生が選択し、両者の打合せのもと、適当な時期に実施することとなった。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

大学間の異分野研究体験（インターンシップ）は、ハードルの高い組合せもあったが、うまくマッチしたのも見られ、その中から3年目の共同研究へと発展していったものも現れた。その中には、薬学会で発表するようなプロジェクトもあり、学生のポテンシャルの高さをあらためて知ることとなった。